となく、論点を提示し、それについて意見を出し合うのに留まる部分が少なくない面（「負け試合」と称する）も、〈結果〉より〈過程〉に主眼を置く本書の性質として、受け入れるべきであろう。

ところが、精読してみると、初学者や研究者以外の人には理解が困難と思われる専門的な内容が少なからずあり、専門書としての性質を捨てていない、あるいは寧ろそちらに重心があるようにも感じる。そのような性質からすると、いま少し踏み込んだ根拠・説得性を伴った形での提案・説明を行うことは、長年「塵芥集」と苦闘して来ている研究者の存在に鑑みれば、最低限必要な誠実さと言えないだろうか。同様の観点から、「塵芥集」に関する基礎研究は勿論抑えているとしても、近年の東北地方をめぐる研究に十分な論究を伴っていない点も気にかかる。例えば守護をめぐる議論について、陸奥国守護が植宗の本意でなかったことはその通りだが、長らく突出し安定した勢力が登場せず、混乱状態が続いていた東北地方において守護がどういう存在であったのか、いまま少し踏み込んだ言及が必要ではないだろうか。

かような指摘に対して、「知的ゲーム」（五頁）なのだ、そういう本なのだ、と言われてしまえば返す言葉は無い。しかし、実際に単なる一般書を超えた専門書としての性質をも有するに至った結果、その評価も両様となり、こと研究者としては、読後に複雑な印象を抱くことも少なくないように思える。ただ、あるいは企画当初は「はじめに」所載の通りの趣

旨だったのが、実際に取り組むうちに熱を帯び、期していたところとはやや異なる内容になったのかもしれないし、それもまた臨場感であり、一つの魅力として捉えるべきなのかもしれない。和やかな雰囲気のみならず緊張感も含めた臨場感を伝えようという意図は十分に伝わるし、著者が関係するテレビ番組や女優の名前を出すこともこの流れで肯定的に評価したい。但し、初学者・学生もターゲットとするからには、飲食の精算に際する「おあいそ」との表現など、言葉遣いにはいまま少しの配慮を求めたい。

以上、画期的な本書の意義にもかかわらず、的外れな感想に加え、まったく要領を得ない評を長々と書き連ねてしまった。著者にはご寛恕を乞う次第である。（畠山 亮）

坂本忠久著『近世江戸の都市法とその構造』（創文社、

二〇一四年）

一 本書の概要

本書は、著者の坂本忠久氏が近年取り組んできた、近世中後期における江戸の都市法に関する研究の成果をまとめたものである。三つの篇に分けられた九本の論文（第一～六章、補論一～三）と序章・終章で構成される本書の概要は以下の通りである（紙幅の都合により補論は割愛する）。

序章「先行研究の整理と本書の課題」では、三都（京都・大坂・江戸）の都市法に関する先行研究を整理し、三都のう

ち江戸の事例研究が十分でなく、『江戸町触集成』も未活用であること、先行研究で提出された諸論点について具体的な分析が少ないこと、長い期間の検討がなされていないこと、を指摘する。そのうえで、本書の課題や方法として、①江戸の都市法自体の構造と特質を解明すること、②享保・天保期の比較的長期間にわたる変遷を追究すること、③町触のみならず、町役人等に伝達される「行政法規」を含め、都市法を網羅的に分析すること、の三つをあげる。また、史料としては、『江戸町触集成』とともに、主として一八世紀～一九世紀前半の法令類を収めた『類集撰要』や天保改革期の法令類を収めた「天保度御改正 諸事留」を用いるとする。

第一篇「江戸における都市法の構造」は、第一章・補論一・補論二・第二章からなる。

第一章「近世江戸の都市法とその運用・施行に関する一試論——『類集撰要』(旧幕府引継書) 巻七・巻八を素材として——」では、近世の江戸における都市法の運用や施行のあり方に考察を加え、次の点を明らかにする。①町奉行所より町方に出された法には、「惣触」や「町触」だけでなく、町奉行を発給主体とする「申渡(被仰渡)」、町年寄や与力を発給主体とする行政法規、年番名主をはじめとする町役人の間で取り交わされた「申合」などがあった。幕府の基本法令集である『御触書集成』には惣触と町触が主に収録され、また、従来の研究は惣触や町触を検討の中心にすえてきたが、行政法規や申合も惣触・町触と密接に関連しており、江戸の都市法

については、これらを総合的に理解することが必要である。②町年寄や与力が政策を実施する際には、町役人に「尋」ねて「答」(回答)を得ることを通じ、町方の実態や先行法令の有無等を事前に調査したり、評判や影響を事後に確認していた。さらに、申合も拘束力を有することがあり、都市法の一環をなしていた。このように法の運用される局面では、町年寄や与力が独自の重要な役割を果たすとともに、町方の意向を受け入れる柔軟なしくみが存在した。

第二章「都市法における「尋」と「答」の目的とその機能——江戸の「地面」と「人別」の問題を分析対象として——」では、「地面」(土地)と「人別」の問題をとりあげ、町年寄・与力と町役人の間で交わされる尋と回答(諮問)が、都市社会の実態調査や情報収集、先行法令の確認や実効性の検証、触に関する施行細則の決定など、多様な目的と機能を有したことを指摘する。

第二篇「都市政策の展開と都市法の整備」は、第三章と第四章からなる。

第三章「近世中後期・江戸の「町火消」制度の変遷とその特色——特に町役人宛ての法令類を通じて——」では、享保・文政期の江戸における消防(「町火消」)制度の変遷を跡づけ、①時期的な変遷を動態的に把握することは、消防制度を全体として評価する際に不可欠であること、②政策の具体的な内容や施行細則は行政法規によって決定される場合が多く、また、町役人の回答や要望も政策に反映されるため、行政法規

を分析することにより消防制度の変遷や実効性がうかがえること、を論じる。

第四章「紛失物吟味」制度の変遷に見る「都市法」の成立」では、享保期以降の江戸における「紛失物吟味」制度の変遷を追い、①紛失物吟味制度について、行政法規は町触と同様の位置を占めていたこと、②平松義郎氏の研究は制度の成立を評価しきれていないこと、③制度の問題点を把握し、その実効をあげるため、町奉行・町年寄・与力・町役人などが一体となって機能したこと、を述べる。

第三篇「天保改革期の都市法の特色」は、第五章・補論三・第六章からなる。

第五章「天保改革期の江戸における都市法の内容構成とその特質」では、天保改革期の江戸における都市法の内容構成を概観し、①南北町奉行所や町年寄を発給主体とする申渡が多く出され、当該期に特徴的な市中取締掛名主・諸色掛名主等を通して町役人に伝達されたこと、②申渡は本来、町役人に伝達される行政法規であったが、与力・町年寄と町役人の合意によって町人にも伝達され、町触と類似の性格を有したこと、を指摘する。

第六章「天保改革期の江戸における都市法の構造とその運用」では、天保改革期の江戸における都市法の構造とその運用について考察し、①「基本法」である町触や申渡（被仰渡）、基本法の施行細則の役割を果たす行政法規、基本法を遂行・補完する申合などが密接に関連しながら都市法の全体

を構成したこと、②運用の局面では、基本法を厳格に適用するだけでなく、与力や町年寄等の実務役人が現状に合わせて独自に解釈したり、町方の意向を取り入れつつ部分的に修正するという臨機応変の対応がなされたこと、を明らかにする。終章「近世中・後期の江戸における都市法の特質」では、本書で検討した結果を整理したうえで、近世都市法の特質として、①町触と（尋・回答や申合を含めた）行政法規とが関連し、重層的な構造をなしたこと、②町方の意向も反映されるなど、「上意下達」でなく柔軟に機能したこと、をあげる。

二 本書の成果

本書は、法制史学・日本史学の両分野で評価の高い一連の作品（『天保改革の法と政策』創文社、一九九七年。『近世後期都市政策の研究』大阪大学出版会、二〇〇三年。『近世都市社会の「訴訟」と行政』創文社、二〇〇七年）につづく、著者四冊目の論文集である。本書に収める九本の論文のうち第一章は、著者が二〇一二年六月の法制史学会第六四回総会における研究報告をもとに、同年一〇月の『法学』（東北大学法学会）第七六巻第四号に公表した論文である。この章は、本書の中核となる部分であり、近世江戸の都市法を構成する諸要素とそれらの全体像が示されている。他方、第二章以下は、第一章で論じた内容を発展させつつ、豊富な事例をもとに考察を深めている。なお、第一章以外はすべて新稿であり、著者の精力的な研究姿勢には頭が下がる。

本書の成果は多いが、その主なものとしては、第一に、良質の一次史料を幅広く収集・分析することにより、都市法の構造と特質を具体的に明らかにした点である。「類集撰要」や「天保度御改正 諸事留」をはじめとする「旧幕府引継書」中の原文書と『江戸町触集成』に収録される法令・記録類は、江戸における町奉行所の法や政策、都市社会の状況等を考えるうえで最も基本的な史料であるが、分量が膨大なために、必ずしも十分活用されてこなかった。本格的な分析には相当の労力と熟練を要することから、本書の価値は高い。

第二に、時期的な変遷を追うことにより、法や制度を動的に把握しようとする点である。第三章では、消防制度の内容とその変遷を探り、当該分野を前進させた。また、第四章では、紛失物吟味制度の成立と展開を段階的に跡づけることで、平松氏の先行研究を実証的に修正した。法や制度を確立されたものとして静態的にとらえがちな従来の研究に新たな視角を導入した本書は、今後に大きな影響を与えるものと思われる。

第三は、町奉行所（領主）による一方向の「上意下達」ではなく、住民を含めた双方向の関係のなかで都市の法や政策が形成・運用されるしくみを鮮やかに描き出した点である。

たとえば、町年寄や与力は政策を実施する際、町役人を通じて都市社会の実態や先行法令の有無を事前に調査したり、評判や影響を事後に確認していたが、これらは現代の政策過程にも通じる興味深い議論である。また、町年寄・与力等の実

務役人が町方の現状や町役人・町人の意見等をふまえて柔軟に解釈・修正するなど、住民側の意向を反映する（「合意」を調達する）形で都市法が実現していたとの指摘は、近世法の特色や近世支配の本質を的確につかんでいる。

第四に、先行研究が主に対象としてきた町奉行による町触（や惣触）だけでなく、町年寄・与力等による行政法規としての申渡や尋（と）町役人からの回答、町役人間の申合などを含め、江戸の都市法を総体として理解しようとした点である。町奉行や与力はもちろんのこと、町年寄さらには町役人をも主体とし、さまざまな類型を提示することで、都市法が重層的な構造をもち、柔軟に機能するあり方を浮き彫りにした本書は、研究史に残る重要な成果である。また、触や申渡といったタテの法のみならず、申合のようなヨコの法も都市法の一環をなしたとする見方は、示唆に富む。

なお、本書で考察した都市法に関する諸論点については、朝尾直弘氏による町代触や願触（『朝尾直弘著作集 第六巻 近世都市論』岩波書店、二〇〇四年）をはじめ、すでに他の研究でも部分的に言及・検討されているものが少なくない。しかし、政治の中心地・最大の都市である江戸を対象として、多様な主体の相互関係や時期的な変遷を追究しつつ、法をトータルに把握する豊かな歴史像を構築した点は、従来の研究を理論的にも実証的にも大きく進展させている。

三 本書に対する疑問点

以上の成果を確認したうえで、評者が感じた疑問を若干述べたい。

第一に、行政法規の概念に不統一がみられる点である。序章には「町触以外の各種の『行政法規』にまで考察の対象を伸ばし、江戸の都市法に関して可能な限り網羅的に分析する」、あとがきには「本書のなかでは、それら町触以外の法令を便宜上一括りにしてその本来の性格から『行政法規』として理解している」とあるように、町触（や惣触）だけでなく、それらを運用するための行政法規がひろく存在・機能したことを明らかにし、都市法全体のなかに位置づけた点、すなわち、近世の都市法を理解するためには、町触のような狭義の法のみならず、行政法規などを含めた広義の法を視野に入れることが不可欠であることを論証した点は、きわめて意義深い。しかし、本書における行政法規の定義はやや曖昧で、とくに申渡（被仰渡）や申合との関係に不統一がみられる。

たとえば、第六章には「町触、申渡（被仰渡）、各種の行政法規、町役人間の『申合』等は、各々関連性を有しながら、複合的に組み合わされて全体を構成している」とあり、申渡や申合は行政法規と区別される。他方、終章には「数多くの申渡（被仰渡）や達が町奉行所から各種の町役人に対して伝達されており、（中略）本書では、これらをその本来の性格から『行政法規』として位置づけようと試みた」「江戸における都市法のなかに、町触とともに、「尋」や回答さらには

申合を含めた『行政法規』を明確に位置づけて総合的に理解する必要がある」とあり、申渡や申合は行政法規に含まれている。このような行政法規と申渡・申合をめぐる概念の不統一は、都市法の構造的な理解をいささか難しくするように思われた（なお、申渡については、本書中に町奉行の発給するものと与力や町年寄の発給するものとがあり、この点の説明も望まれる）。

第二に、与力と町年寄の上下関係が不明確な点である。第一章には「町奉行を発給主体とする触類や町年寄や与力が独自に発給したと思われる行政法規の他に、年番名主や肝煎名主間の通達や申合の存在を見出すことができる」、第四章には「町奉行、町年寄、与力、年番名主等が三位一体となつてその実効性を挙げるために機能している様子を見て取ることができる」とあり、本書では、与力よりも町年寄の方が上位であるかのように議論が展開されている。しかし、与力は、武士身分（しかも將軍の直臣）であるのに対して、町年寄は（相応の名誉や特権が与えられるとしても）あくまで町人身分である。町年寄は、与力のような町奉行所の役人と、町人のなかから選任される年番名主等の町役人との間にあって、都市支配の実務を担う存在（いわゆる中間支配機構）である。周知の通り、日本の近世には身分上、支配・被支配の区別が厳然と存在し、そうした区別のもとに幕府や藩の政治組織が運営され、法や政策が実施されていた。また、本書のとりあげる事例では、都市法の運用をめぐるで与力と町年寄が連

携しながら重要な役割を果たす様子がうかがえるが、そこでも両者は区別され、与力が上、町年寄が下に位置づけられている。本書では、この点が曖昧なために、論旨に少々わかりづらいところがあった。町奉行―与力―町年寄―町役人という主体間の序列を意識しつつ、与力と町年寄がそれぞれどのような位置や役割をもち、両者がどのような関係を取り結んだのかを追究することで、都市法の重層性や柔軟性がいつそうクリアになり、さらに説得力が増すと思われた。

以上、本書の概要と成果、疑問点を述べてきた。評者の不勉強によりの外れなところも多々あるものと恐れるが、著者と読者のご寛恕をたまわりたい。本書は、良質な一次史料を丹念に分析することで、近世中後期の江戸における都市法の構造と特質を具体的かつ総合的に解明するとともに、近世の法や政策のあり方、権力と社会の関係などについて優れた知見をいくつも導き出している。内容面だけでなく運用面にも注目しつつ、広い視野から都市法をとらえる視角や方法は卓越しており、『御触書集成』等に収録されない多様な法の存在と機能を論じた本書は、今後、都市法のみならず、日本近世の法や都市に関する研究の全般にわたって参照されるべき貴重な業績である。

(小倉 宗)

高澤紀恵ほか著「交差する日本近世史―日仏の対話から」(『思想』一〇八四、岩波書店)

一 本論文集は、直接的には二〇一三年一月二二・二三日にパリ第四大学(ソルボンヌ)において開催された「日本近世の社会と身分」と題するセミナーが出发点となる研究成果とのことであるが、少なくとも近年相次いで公開された高澤紀恵他編『別冊都市史研究 パリと江戸 伝統都市の比較史¹⁾』、『年報都市史研究 一八 都市の比較史²⁾』、高澤紀恵・吉田伸之他編『別冊都市史研究 伝統都市を比較する 飯田とシャルルヴィル³⁾』等から連なる一連の成果の集大成、もしくはそれらの延長線上にある成果としての性格を有しているものと思われる。

都市の比較史的考察の重要性はつとに指摘されているところであるが、とりわけ本企画は、近年の日本近世史の進展ぶりを特徴的に示していると思われる身分的周縁に関する研究自体はもとより、それらの研究がフランスの研究者によって具体的にどのようなように捉えられているのかを窺い知ることができる点で大変興味深く、なおかつ重厚な内容となっている。

二 最初に本論文集の内容を紹介することにしたいが、全体の構成は、次の通りである(後の説明の便宜上、一部に番号を付した)。

①思想の言葉

高澤紀恵